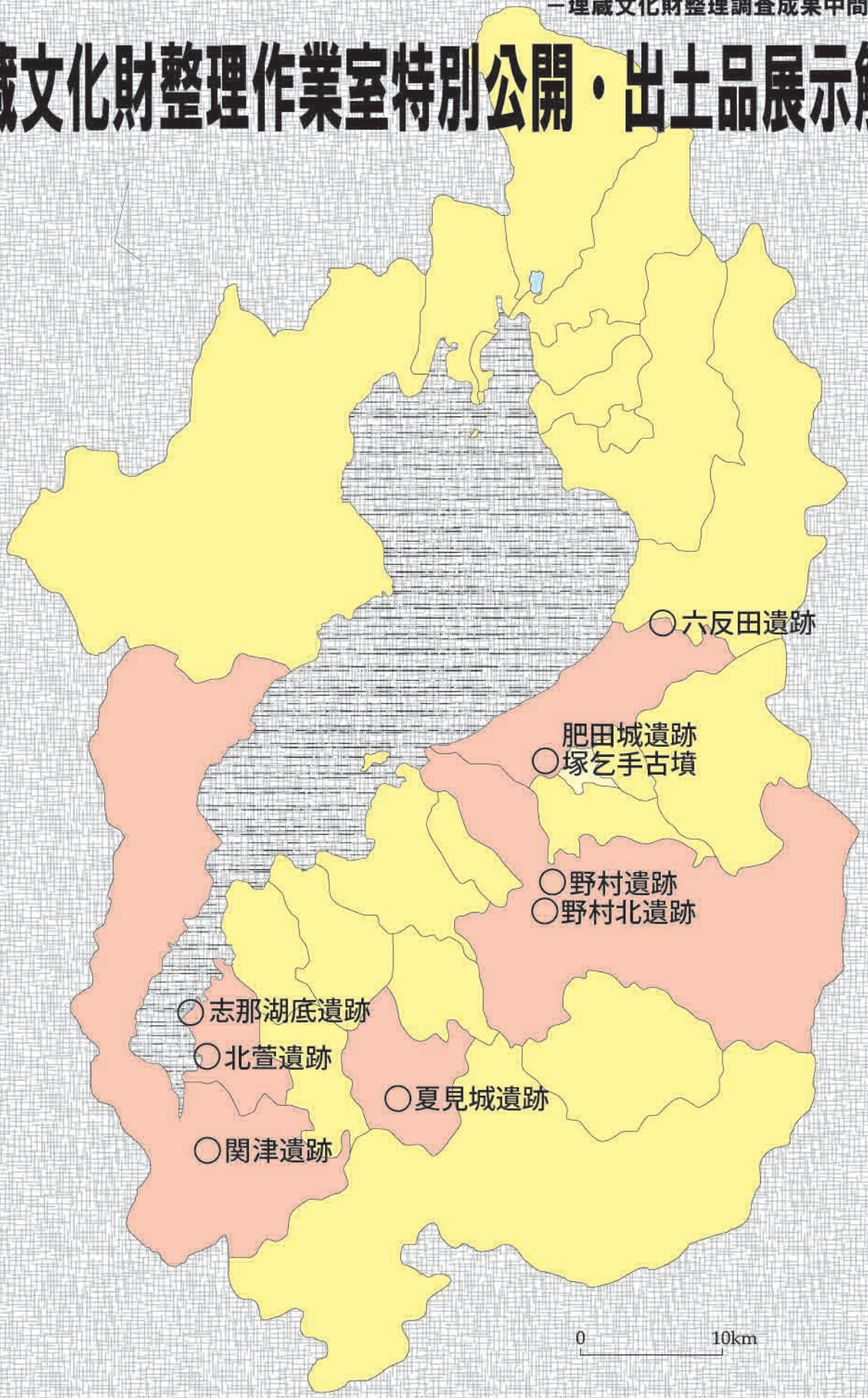
あの遺跡は今！⑦

－埋蔵文化財整理調査成果中間報告会－

埋蔵文化財整理作業室特別公開・出土品展示解説



平成20年８月24日（日）

財団法人滋賀県文化財保護協会

整理調査成果報告会 ―整理作業室特別公開・出土品展示― について

財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会から依頼を受けて県内各地で埋蔵文化財の発掘調査を行っています。発掘調査には、現地で遺跡を発掘して得られた情報を記録する現地調査と、現地調査で得られた情報と土器などの出土品から得られる情報をあわせて遺跡の時代や性格・特徴などをとりまとめる整理調査があります。調査整理課は整理調査を担当しており、その普段の作業の様子は、博物館の回廊展示として窓越しにご覧いただいています。

発掘調査で得られた情報は「現地説明会」を開催していち早く公表していますが、整理調査を通して新たな知見が得られることも多くあります。これらの整理調査の成果を公開する企画として、また、出土品に直接触れる整理作業体験、レプリカ制作、さらに整理作業の様子や出土品の特別公開を通して文化財に親しむ場を提供することを目的として調査整理課では埋蔵文化財整理調査成果報告会・整理作業室公開事業として「あの遺跡は今！」を平成 17 年度から実施しています。

今回の出土品特別公開では、塚乞手古墳から出土した木製埴輪のほか、整理調査中の出土品の中から、大半の遺跡から出土し、遺跡の時期を知る上では欠くことの出来ない土器は敢えて展示せず、遺跡の立地、時代、性格によって出土する数や量に大きな偏りがある木製品・金属製品・石製品・土製品にスポットを当てます。ここでは、これらの出土品を道具として捉えることで、その道具の使用方法、素材の変遷、道具の組み合わせなどから出土した遺跡の性格、特徴、時代などを見学者と一緒に考えてみたいと思います。また、レプリカ制作では塚乞手古墳出土の鳥形木製埴輪の 1/20 の大きさのレプリカを制作していただきます。

整理作業体験では、遺跡から出土した各時代の特徴的な土器に直に視て触れてその特徴をもとに分類作業と拓本をしていただくことで、整理作業を実際に体験していただきます。

この機会に埋蔵文化財の調査成果や出土品を間近で見学し体験していただくことで、より滋賀の歴史を体感し、文化財への親しみと理解を深めていただき、豊かな未来を創造していただければ幸いです

平成 20 年度に調査整理課で整理調査を実施している主な遺跡

遺　跡　名	所在地	調査原因	主な時代
関津遺跡	大津市	ほ場整備	後期旧石器～近世
志那湖底遺跡 北萱遺跡	草津市	琵琶湖開発	縄文～古代 縄文～古代
夏見城遺跡	湖南市	ほ場整備	中世
野村遺跡・野村北遺跡	東近江市	ほ場整備	古代・中世
肥田城遺跡 塚乞手古墳	彦根市	ほ場整備	弥生～中世 古墳
六反田遺跡	彦根市	ほ場整備	縄文・古代

「獲る・捕る」道具

私たちが生活していく上で、まず基本となるのが「食」です。その食生活は、食料の獲得・確保がまず大前提です。どんな食料をどうように「とる」のか、種類・対象によってその方法や道具は異なります。ここでは、人が手で「採り」集めることができる植物以外の動物を「獲り」、魚を「捕る」道具を見てみましょう。

石　鏃

いわゆる四つ足動物を獲物とした狩猟には、ワナを仕掛けたり落とし穴に誘い込んだりする場合もありますが、人類が道具を作り・使うようになった旧石器時代以来、縄文時代・弥生時代を通して石の道具が主役となります。縄文時代初頭に出現する石鏃は、画期的な「飛び道具」である「弓矢」の存在を示すもので、古墳時代以降も銅・鉄製品へと移り変わりながらも、基本的な形を変えずに今に現役で使われています。

石鏃（六反田遺跡）

石材は、琵琶湖周辺では大阪府と奈良県との境にある、二上山産のサヌカイト製が大半を占めていますが、県内でも入手できるチャートや水晶、県内では産出しない黒曜石製など石材は多様です。

土　錘
石　錘

水中の魚類を捕獲するにも、木の先を尖らせた銛（もり）や石製の槍が使われていたと考えられます。これは、大きな魚を捕るには有効ですが、多量の魚を捕るには非効率的です。そこで、登場するのが網を用いた漁法です。網自体の出土がないため、どのようなものかはっきりしませんが、その存在を裏付けるのが網を沈めるための石製や土製の錘（おもり）です。

縄文時代の前期には、川原石を使った石錘、土器の破片を再利用した土器片錘のいずれもが出現しています。弥生時代には土玉のような球形や円筒形の土錘が出現し、須恵質・陶質と変化しながらも現代に受け継がれていきます。

石錘（六反田遺跡）

土器片錘（矢橋湖底遺跡）

土錘（関津遺跡）

「土や作物を作る・道具を作る」道具

ここでは、農作業や土木作業に必要な道具とその道具を作るあるいは生活のあらゆる場面で有用な材料となる木材を加工する道具について見ることにしましょう。

石　斧　石斧は、人が道具を作り出した当初からあるもので、「叩く・割る・断ち切る・裂く・磨る・潰す」など多様な機能を持った万能道具です。石斧だからといって木を切り倒していた、とは簡単にはいきません。出土する石斧をみると、どれも刃の幅は数センチメートルしかなく、最初の一振りも跳ね返されそうです。石斧は、伐採具と言うよりは木製品を加工するための工具として威力を発揮し、弥生時代には削る・抉（えぐ）るといった機能に適した形に分化していきます。

鉄　斧　古墳時代には、道具類の鉄器化が進み、板状鉄斧は伐採用、袋状鉄斧は手斧のような加工用として普及します。

石斧（六反田遺跡）

鉄斧（北萱遺跡）

木製鋤
木製鍬　鋤は、柄と身の部分がスコップのように直線的で、身の肩部に足をかけて踏み込んで土を起こす道具で、柄と身が角度を持って組み合わされ、打ち下ろして土を起こす鍬とはことなります。いずれも、土を掘り起こす道具であり、水田耕作をはじめとして用水・排水路や畦（あぜ）の設置・維持管理などの土木作業を多く伴う稲作農業の波及と共に登場したことから、農具としての印象が強いですが、烏丸崎遺跡では、方形周溝墓の溝からこれを掘った時に使用したと考えられる鋤が出土していることから、農作業以外の土木作業に広く使われていました。

木製鋤（北萱遺跡）

木製鍬（北萱遺跡）

「加工する」道具

遺跡からみつかる道具には多種多様なものがありますが、ここではモノを生産したり、加工するために使った道具を見てみましょう。

石の道具　人類が最初に手にした道具のひとつが石です。石器を作るときに素材となる「剥片（はくへん）」をはがしとった原石を「石核（せっかく）」とよびます。剥片や石核を詳細に観察することによって、石器の製作工程をしることができます。

石と鉄の紡錘車（関津遺跡）

繊維に撚りをかけて糸を紡（つむ）ぐ道具を紡錘とよびます。紡錘車（ぼうすいしゃ）という円盤状の製品の中央に穴をあけ、そこに糸巻き用の棒をいれて回転を利用することによって糸を紡ぎます。

紡錘車も時代によって材質が異なりますが、古墳時代には石製が多く、奈良時代以降になると鉄製のものが多くなります。

砥石は、現在でも家庭の台所にある道具です。主に砂岩を用いることが多く、用途により荒砥用・中砥用・仕上げ砥用があります。

金属の道具　身の回りにはさまざまな金属の製品があります。金属製品を作るためには、まず原料となる鉱石から金属素材を取り出し（製鉄・製銅）、その後製品を作り上げます（鍛冶）。材料となる鉱石や、作業時に排出する滓（鍛冶滓・精錬滓・銅滓など）が遺跡からみつかりますが、ときには和同開珎などの貨幣も材料として用いられることもあります。

坩堝（関津遺跡）

土の道具　金属の製品を作るときに使用する道具に坩堝（るつぼ）と鞴（ふいご）があります。坩堝とは金属をとかしたりするときに用いる土製の容器です。鞴は送風することにより火力を上げるための装置で、送風口には羽口（はぐち）とよばれる土製の筒が装着されていました。

鞴羽口（野村遺跡）

「日常生活」の道具

現代人はボタン１つで電気も水道の使え、店の商品を自由に買うことが出来ますが古代の人々は日常どのような道具を使って日々の生活をしていたのでしょうか。遺跡から出土したさまざまな遺物から、日常生活で使われた道具を調べ、当時の人々の生活を考えてみましょう。

木 製 品　草津市の北萱遺跡・志那湖底遺跡は、水中や湖岸・川岸にあったことから、木製の道具が腐らずに残っています。食器では箸や皿が見つかっています。箸は古墳時代の 1500 年以上前から使われていました。割り木の板を丁寧に削った木製の皿は貴重なものです。古い時代の作り方は、ヤリガンナなどで丁寧に削って薄くしています。そのため形は少々歪んだりします。こうした容器を刳り物と呼びます。時代が新しくなるとロクロを使って薄くより円形に近い精巧な食器が作られます。平安時代以降たくさん出土する漆塗りの椀は代表的なものです。

皿と箸（北萱遺跡）

金属製品　大津市関津遺跡から鉄製の釘と銭貨が見つかっています。釘には目釘と打ち込み釘があります。目釘は木や竹の釘で、穴を開けた２枚の板などにを木や竹の釘を打ち込んで固定します。現在でもよく使われる鉄製の釘は打ち込み釘で、板などに直接打ち込んでその摩擦で結合させます。今回出土した釘は鉄製の釘 で、断面が四角で頭を曲げて使います。

銭貨は中国初鋳の開元通宝・祥符元宝・皇宋通宝・永楽通宝などが出土しています。日本では、平安時代終わり頃から流通し、関津遺跡でも銭貨を使った経済活動が行われたと考えられます。

石製品　彦根市六反田遺跡では約 3500 前の縄文時代の石器が見つかっています。石匙（せきひ）と呼ばれる小型のナイフやクリなどの木の実を砕いた石皿、木の実を摺りつぶした磨石（すりいし）、木の実を叩き割る敲石（たたきいし）などが見つかっています。

磨石と石皿（六反田遺跡）

「身嗜み」の道具、「遊び」の道具

ここでは、身嗜(みだしな)みを整えるために使われた道具、県内では出土例が多くない遊びの道具を見てみましょう。

短　刀　短刀は腰刀とも呼ばれ鎌倉時代以降は庶民も帯刀するようになります。刀は武器として使われるほか、魔除けの力を持つと考えられており枕刀としも使われ、死者の枕元や胸元に置かれたり、そのまま墓に一緒に埋められました。関津遺跡では墓の中から皿や椀とともに出土しています。

笄　　笄（こうがい）は女性の髪飾りの一種ですが、古くは男女とも携帯しました。室町時代に女性の髪飾りとなり、江戸時代になると櫛とともに流行します。そして、当初は小型であったものが大型化して江戸時代中頃に時代劇に見るような簪(かんざし)となります。材質は木、竹、金属、鼈甲、象牙、ガラスなどがあります。

櫛　　髪を梳き整え、汚れや虱を取り除くための櫛には竪櫛と横櫛があります。縄文時代から古墳時代中期までは竪櫛が使われますが、後期に横櫛が伝来してからは横櫛が主流となります。櫛は、実用的用途のほか呪術的な力があるとも考えられていました。関津遺跡出土の櫛はイスノキで作られています。

木　球　中世の大人たちは、隻六（すごろく）、将棋、囲碁などを楽しんでいました。一方、子供たちは、羽子板、手鞠、竹馬、毬杖(ぎっちょう)などで遊んでいたことが絵画史料や出土品から判っています。大津市関津遺跡では毬杖で使われた木球が出土しています。毬杖とは、柄の付いた杖で木製の毬（木球）を打ち合う遊戯で古代に中国から伝わり中世に一般化します。オリンピックの競技種目であるホッケーに似た遊びです。

短刀（関津遺跡）

櫛（関津遺跡）

木球（関津遺跡）

「お役人」の道具

701 年（大宝１）、大宝律令の制定により、天皇を頂点とした官僚機構が整備され律令国家が完成します。そして、中央集権体制を確立するために地方の官衙（役所）の整備や役人の派遣、中央と地方を結ぶ幹線道路の建設など、様々な地方行政の整備が進められます。

当時の役人は文書の作成が必須の仕事でした。そのため、墨、筆、硯（すずり）、刀子（とうす）は必需品でした。紙は高価であったため文書の作成には木簡（もっかん）が利用されました。特に刀子は木簡の誤字の修正やリサイクルを行うためには必需品であったことから、当時の役人は「刀筆の吏」とも呼ばれます。ここでは、奈良時代から平安時代前期の律令国家の主役とも言うべき「お役人」の道具の一部を紹介します。

硯　　硯は、中央、地方ともに円面硯が広く使われますが、実務に携わる下級の「お役人」は、主に食器である杯やその蓋などを利用した転用硯を利用していました。奈良時代の終わり頃から平安時代前期にかけては、漢字の風の形をした風字硯（ふうじけん）が流行します。また、特殊な硯として羊や龍の容姿を象った形象硯もあります。現在、一般に使われている石の硯は平安時代中期（10 世紀）から使われるようになります。

風字硯（関津遺跡）

帯金具　　当時の「お役人」は、衣服など身に着けるものまで位階に従って規定されていました。腰に巻くベルト（腰帯）の飾り（帯金具）もそのひとつで、高級役人や貴族など五位以上は銅の地金に金や銀の装飾が施されたもの、六位以下の下級役人は黒漆塗の簡素なものでした。奈良時代の終わり頃からは、石で作られたものが使われます。

帯金具（関津遺跡）

馬　具　日本では、古墳時代から馬の利用が始まります。馬は、戦闘や農耕に利用されるだけでなく、情報の伝達手段としても利用され、人が安定した状態で乗馬するために鐙（あぶみ）と鞍（くら）は必需品でした。そして、情報を迅速に伝達するために駅伝（えきでん）制という仕組みが作られ、都と地方を結ぶ幹線道路に沿って約 16 ㎞ごとに駅（うまや）が置かれました。この駅伝制の名残が現在も人気のある駅伝競技です。また、JR や私鉄の駅、高速道路の SA や PA、道の駅も名残の施設です。

「特別」な道具

ここでは、普通の集落遺跡では出土しない特別な道具について見てみましょう。ここに見る道具からは、断片であっても出土する遺跡の性格を推し量ることができます。

土　　馬　　今でも神社に参詣すると、境内の一角に奉納された絵馬を見ることができます。絵馬は、奈良時代から使われるようになります。馬は、神の乗り物として神聖視されていました。そのため、旱魃（かんばつ）や長雨の時に馬を献じたり、外来の神を祀る祭りの際に馬を殺すなどの祭祀にも用いられていました。とくに奈良時代には、祭祀のために生きた馬の使用を禁止されたこともあり、絵馬のほか、馬を摸して土で作った土馬が盛んに用いられました。

土馬は、都で作られたものと地方で作られたものでは違っていました。宮都の土馬は、一見すると犬にも見えるように形が簡略化され小型化されています。数が必要であったためと考えられます。一方、地方の土馬は、写実的で大型のものが一般的です。

宮都型の土馬（関津遺跡）

製塩土器　　塩は、人が生きるためには欠くことの出来ないものです。日本では岩塩がないため、海水から採取し、縄文時代後期から平安時代前期までは専用の土器を使って塩が作られました。内陸部に位置する近江では、塩は全て海辺の国から持ち込まれました。関津遺跡では、北陸地方と瀬戸内地方の製塩土器が出土しています。

瓦・塼　　現在は、瓦葺きの建物は普通に見ることができます。しかし、古代は、瓦葺きの建物は寺院や官衙、貴族の邸宅などに限られていました。

塼（せん）は、現在のレンガやブロックと同じような使われ方をし、主に寺院で使われました。関津遺跡では少量ですが両者が出土しています。どのような使われ方をしたのでしょうか。

Memo

近江の玄関口　田原道と関津浜

遺 跡 名　関津（せきのつ）遺跡

所 在 地　大津市関津一丁目

調査年度　発掘調査：平成16～19年度
整理調査：平成17～22年度（予定）

調査原因　県営ほ場整備事業
国道 422 号改良工事

道路跡と建物群（瀬田丘陵を望む）

概　　要　後期旧石器時代から江戸時代までの遺構と遺物が見つかっています。

奈良時代から平安時代前期のものとしては、『続日本紀』に記述のある「田原道」とみられる幅員18mの道路跡、道路沿いに建ち並ぶ建物群、多数の官衙的遺物が見つかっています。また、平安時代中期は畠跡、平安時代後期から鎌倉時代は多数の建物、県外から持ち込まれた大和型瓦器を中心とする土器類や中国から輸入された磁器が多量に出土しています。室町時代には、瀬田川東岸で江戸時代の関津浜の前身と考えられる港湾施設の一部が築かれています。

出 土 品　関津遺跡では、多量の土器とともに土製品・石製品・金属製品・木製品が多数出土しています。

土製品は、祭祀に使われた土馬、漁業に用いられた土錘、建物に使われた瓦や塼、宝船を模した庭道具、鍛冶に使われた鞴の羽口、銅を溶かすための坩堝など、石製品は、縄文時代の鏃、斧、サヌカイトの原石や剥片のほか、石器や金属の研磨などに使用された砥石、糸を紡ぐ際に用いられた紡錘車などが出土しています。

金属製品は、釘、鎌、紡錘車、短刀、銭貨、また、鉄鉱石や製鉄炉から排出された鉄滓、鍛冶炉から排出された鍛冶滓も出土しています。

木製品は、護岸施設に使われた杭、井戸枠として使用された板や曲物、木簡、農具、木沓、下駄、木球などが出土しています。

このほかにも、普通の集落ではあまり出土しない、製塩土器や硯も出土しています。

竪穴住居の竈に転用された砥石

遺跡の空白を埋める湖中の遺物

遺跡名	北萱（きたがや）遺跡
所在地	草津市矢橋町
調査年度	発掘調査：昭和 60・61・63・平成元年度 整理調査：平成 14・15・20 ～ 25 年度
調査原因	新草津川改修
概要	明確な遺構はありませんが、縄文時代から近世までの遺物が出土しています。これらの遺物は、北萱遺跡の上流に位置する御倉（みくら）遺跡・襖（ふすま）遺跡・狭間遺跡などから河川によって運ばれ、河口～湖岸にあたる当地に堆積したと考えられます。 矢橋町から橋本町にかけての地域は、新草津川関連の発掘調査が実施されるまでは、ほとんど遺跡が知られていませんでしたが、北萱遺跡をはじめとして弥生時代～平安時代を中心とする遺跡が連続的に営まれていたことが明らかになりました。
出土品	北萱遺跡からは土器類の他に、土錘などの土製品、農耕具や食膳具（しょくぜんぐ）などの木製品、石鏃・砥石などの石製品、銭貨（せんか）類などの金属製品が出土しています。 土器類は、最も古いものは縄文時代前期 (約 6,000 ～ 5,000 年前頃) にまで遡りますが、最も多く見られるのは縄文時代後期～晩期 (約 4,000 ～ 2,300 年前頃) とこれに続く弥生時代前期～中期 (～約 1,900 年前頃) のものです。この傾向は、同じ草津川下流域に位置する志那湖底遺跡や七条浦遺跡にも見られます。 弥生時代～古墳時代の木製品では、鋤（すき）や鍬（くわ）などの農耕具と共に杭や矢板状のものが多く出土しており、水田開発やこれに伴う用水・排水の維持管理にこれらの木製品が使われていたのでしょう。古墳時代～中世の木製品には、食事に用いる箸（はし）や皿、あるいは下駄（げた）など、日常生活には欠かせない道具類が出土しています。

縄文時代・水辺の墓域

遺跡名	志那湖底（しなこてい）遺跡
所在地	草津市志那中町地先
調査年度	発掘調査：昭和 57 ～ 63 年度 整理調査：平成 14・15・20 ～ 25 年度
調査原因	琵琶湖開発事業
概要	弥生時代中期頃の「袈裟襷文銅鐸」や磨製石剣をはじめとする弥生時代の遺物散布地として知られていましたが、発掘調査の結果、湖底には縄文時代後期～晩期 (約 4,000 ～ 3,000 年前頃) の土器棺墓などが存在していたことが明らかになりました。 また、銅鐸や磨製石剣と同じ弥生時代中期 (約 2,200 ～ 1,900 年前頃) の土器類も多量に出土し、湖岸近くでは弥生時代後期～古墳時代の木製品が多量に出土した溝などの遺構も存在することがわかりました。
出土品	出土した遺物の大部分を占める土器類のほかに、土錘などの土製品、鍬などの木製品、石剣などの石製品、斧などの鉄製品が出土しています。 土器類の中でも半数以上を占める縄文土器は、棺として埋納された深鉢の他に、コゲや吹きこぼれなど煮炊きによって付着した炭化物が器面に分厚く残っているものが多くあります。このことから、一連の発掘調査では発見できませんでしたが、近辺に生活空間があると考えられます。 また、縄文時代晩期の土器には、中部山岳地帯・北陸～東北地方で特徴的な文様を持つものや赤色顔料で彩色されたものもあり、土器文化や技術の交流の広さを知ることができます。 土器類と比較すると石製品の量は極めて少量ですが、複数の磨製石剣の破片や磨製石鏃、玉砥石など、祭祀色の強いものや特殊な道具が目に付きます。これらが、原位置をとどめている可能性は低いですが、銅鐸と共に特殊な遺物が、なぜ、この地にあるのか、を解明することが地域の歴史的な特質を明らかにする手がかりになると考えられます。

「武士の嗜み・身だしなみ」アラカルト

遺 跡 名　夏見城（なつみじょう）遺跡
所 在 地　湖南市夏見地先
調査年度　発掘調査：平成 19 年度
　　整理調査：平成 20・21 年度
調査原因　県営経営体育成基盤整備事業
概　　要　東海道に面した丘陵上には、地元土豪である夏見氏の居城と伝わる夏見城跡跡があり、発掘調査によって丘陵縁辺から街道の間にも鎌倉時代～室町時代の城郭やこれに伴う屋敷地を区画する溝（堀）などが拡がっていることが明らかになりました。

発掘された区画溝

出 土 品　出土品の大半は、調理具・食器類の土器類です。当時の万能調理具である信楽焼きのこね鉢・すり鉢、土師質の焙烙（ほうらく）や羽釜がかなり多数出土していますが、一般的にはこれらの調理具よりも多量に出土する坏・皿・碗が意外と少なく、土器類ではなく、木製の食器類を多用していた可能性もあります。

一方、室町時代頃の最先端の文化的流行の一つとして「喫茶」があります。夏見城遺跡の出土品の中にも、数多くの茶道具があります。中国製の天目茶碗・青磁・白磁・染付の碗、国産陶磁器では信楽焼きの蹲（うずくまる）・盤（ばん）・水差し・鬼桶（おにおけ）や瀬戸美濃産の黄瀬戸平碗・花瓶・天目茶碗・天目茶入れ、瓦質土器の香炉（こうろ）・風炉（ふうろう）などが出土しています。この様に、茶道具一式が揃えで出土することは珍しく、夏見城の大きな特徴と言えます。

真鍮製毛抜き　左：鶴・右：オモダカ

また、身だしなみに関わる出土品もあります。まず、「武士の顔」に威厳（いげん）を与える髭（ひげ）や眉（まゆ）の手入れに使用される毛抜きです。真鍮（しんちゅう）製で、縁起を担いでか、鶴とオモダカが彫られています。当時は、紅をさすのは女性だけとは限りませんので男女どちらの身だしなみかはわかりませんが、紅皿（べにざら）も出土しています。

扇状地に暮らす

遺 跡 名　野村（のむら）遺跡・野村北（のむらきた）遺跡

所 在 地　東近江市野村町

調査年度　発掘調査：平成18・19年度
整理調査：平成19・20年度（予定）

調査原因　県営経営体育成基盤整備事業

概　　要　愛知川によって形成された扇状地上に営まれた遺跡で、飛鳥時代から室町時代にかけての遺物が見つかっています。なかでも奈良時代と平安時代後期の集落跡の状況から、この時代に盛んに水利条件の悪い扇状地を開発した様子がうかがえます。

奈良時代の掘立柱建物

出土遺物　奈良時代のものと考えられる銅製の絞具（かこ）が出土しました。絞具とは、ベルトのバックルにあたる部分で、この時代には一般庶民がつけることができないものです。開発にあたった有力者がつけていたものかもしれません。

平安時代後期（11世紀～12世紀）の遺物として、土師器皿や黒色土器などとともに緑釉陶器や底部糸切り土師器も多く出土しています。また、鉄製品とともに鞴の羽口や鉄滓なども見つかっており、集落の中で鍛冶をしていたこともわかりました。

奈良時代の水路

平安時代の掘立柱建物

鞴の羽口と鉄滓が付着した状態で見つかりました。周囲には焼けた土や炭もあり、ここで鍛冶をしていた様子がうかがえます。

木のハニワと土のハニワ

遺 跡 名　肥田城（ひだじょう）遺跡・塚乞手古墳（つかごえでこふん）

所 在 地　彦根市肥田町

調査年度　発掘調査：平成18・19年度

整理調査：平成19・20年度（予定）

調査原因　県営経営体育成基盤整備事業

概　　要　弥生時代から江戸時代までの遺跡として知られていますが、今回の調査で、新たに古墳が存在することが確認されました。この古墳は現在の地表面にはまったく痕跡をとどめていませんが、かつてここに古墳があったことを示すように「塚乞手」という地名が残っていました。

塚乞手古墳の周溝

調査範囲の制約もあって古墳の形や大きさについては明らかになりませんでしたが、古墳の周囲に掘られた周溝から土で作られたハニワとともに「木のハニワ」が見つかりました。

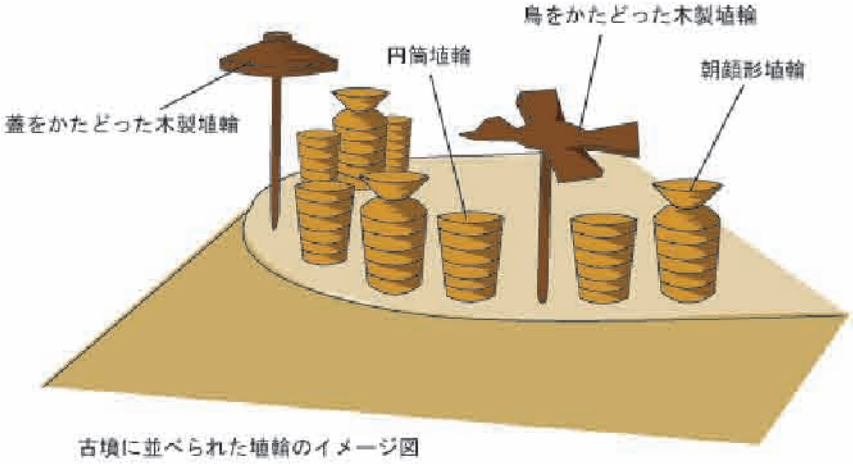
出土遺物　見つかった木のハニワは、鳥形1点と貴人にさしかける蓋（きぬがさ）をかたどった笠形1点、これらを立てるときに支柱としたと考えられる杭状の木製品1点が出土しました。このような木のハニワが出土した古墳は全国でも40基ほどしかなく、そのうち21の古墳が奈良県ですが、ついで滋賀県が9古墳と多くなっています。また、滋賀県でもそのほとんどが湖南地域にかたよって出土しています。

木のハニワの出土地分布図

出土した鳥形のハニワは、長さ59cm、最大幅20.5cmで、胴部には支柱を差し込んだと考えられる方形の穴が上下に貫通し、上面には翼をはめ込むためのくぼみが作られています。笠形のハニワは27cmほどの円形で、高さは８cmとなります。鳥形と同じく中央に方形の穴が上下に貫通しています。鳥形・笠形ともに全国の出土品の中でも小型の部類となります。また、スギを使用して製作しています。

出土した木のハニワ

木のハニワはこれまでの研究によって５世紀前半から６世紀前半にかけて用いられていたことがわかっています。今回、塚乞手古墳から出土したものも、同時にみつかった土で作られたハニワの年代から６世紀前半頃のものと考えられます。用途としては古墳の墳丘に土のハニワとともに並べられ、境界の明示や被葬者の権威を示す役割を担っていたと考えられます。



古墳に並べられた埴輪のイメージ図

物流のターミナル

遺 跡 名　六反田（ろくたんだ）遺跡
所 在 地　彦根市宮田町
調査年度　発掘調査：平成19年度～
　　整理調査：平成20年度～
調査原因　中山間地域総合整備事業
概　　要　縄文時代後期の住居跡、埋甕（うめがめ）、飛鳥時代と平安時代の建物跡、川跡などが確認されました。飛鳥時代の川跡からは、杭列・横木・石材を組み合わせた護岸施設、平安時代の川跡では舟の接岸を容易にするために岸辺の一部を拡幅した状況などが明らかとなっています。川跡からは、転用硯、円面硯、墨書土器、土馬、木沓、木簡などの官衙的な遺物が多数出土しています。さらに川沿いでは約20棟の建物跡も見つかっています。

遺跡の立地は、官道である東山道に近く、琵琶湖に流れ込む矢倉川に接するなど陸路と水路の結節点に位置します。見つかった護岸施設や建物群は、物流のターミナル的性格をもつ公的施設であったと考えられます。

平安時代の川跡

出 土 品　六反田遺跡では、飛鳥時代と平安時代の官衙的遺物のほか、縄文時代後期の土器や石器も多数出土しています。

中でも縄文時代後期の石器は、狩猟具である石鏃、漁労具である石錘、堅果類を加工するための石皿と磨石、樹木を伐採するための石斧、石器を制作した際に排出された剥片などが出土しています。

木簡(もくかん)の真空凍結乾燥処理(しんくうとうけつかんそうしょり)

1．木簡の調査

木簡は、木片に墨で字などが書かれている貴重な資料です。多くの木簡は、木質が劣化していると同時に、字が消えかかっているものが多くみられます。これらの墨書資料の調査では、赤外線テレビカメラが活躍します。

保存処理前(関津遺跡)

2．木簡の真空凍結乾燥処理

劣化した木簡を強化するため、真空凍結乾燥法という保存処理法を実施しています。真空凍結乾燥はフリーズドライ法と呼ばれ、私たちの身の回りの食品や薬品の製造に広く利用されています。　その原理は、水分を含んだものを－30℃以下で急速に凍結するとともに、真空状態で内部の水分を昇華させて乾燥させる方法です。

乾燥する前の準備段階で、木材の内部にPEG(ﾎﾟﾘｴﾁﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙ)と呼ばれる樹脂を、重量比で約60%しみこませておくことで強化されます。この方法の特徴は、乾燥による収縮や変形が少なく、処理したものは色が明るくなり、その結果、墨書などが見やすくなります。

真空凍結乾燥の準備

真空凍結乾燥機(処理中)

3．保存処理の工程

(1)黒くなった資料は、漂白(ひょうはく)処理します。

(2)PEG樹脂を約60%まで少しずつしみこませる。

(3)真空凍結乾燥処理。

①凍結乾燥機を-30℃に冷却する。

②前処理した木簡を乾燥機に入れる。

③十分凍結させ、真空状態で乾燥する。

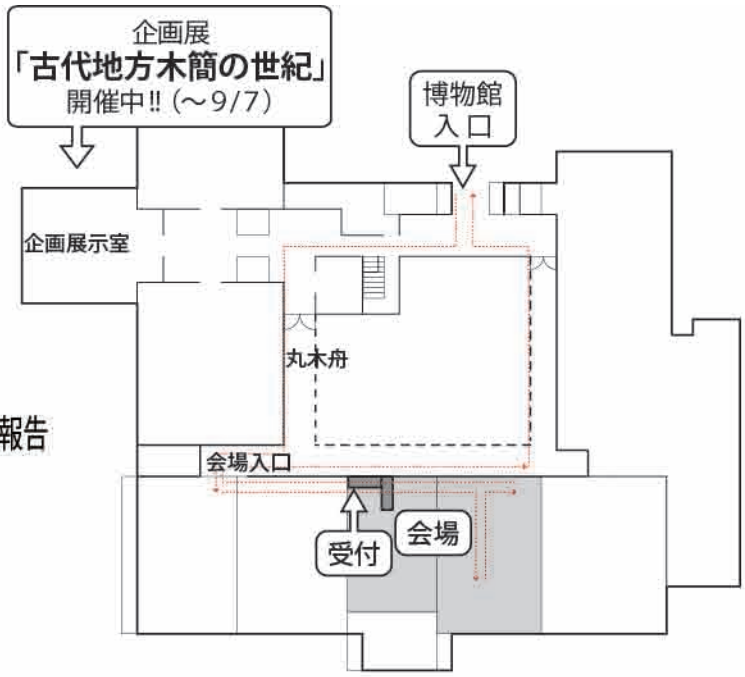
④表面処理して仕上げる。

保存処理後(表面)

保存処理後(裏面)

4．保管・展示・活用する。

あの遺跡は今！⑦
－埋蔵文化財整理調査成果中間報告会－
会場案内図



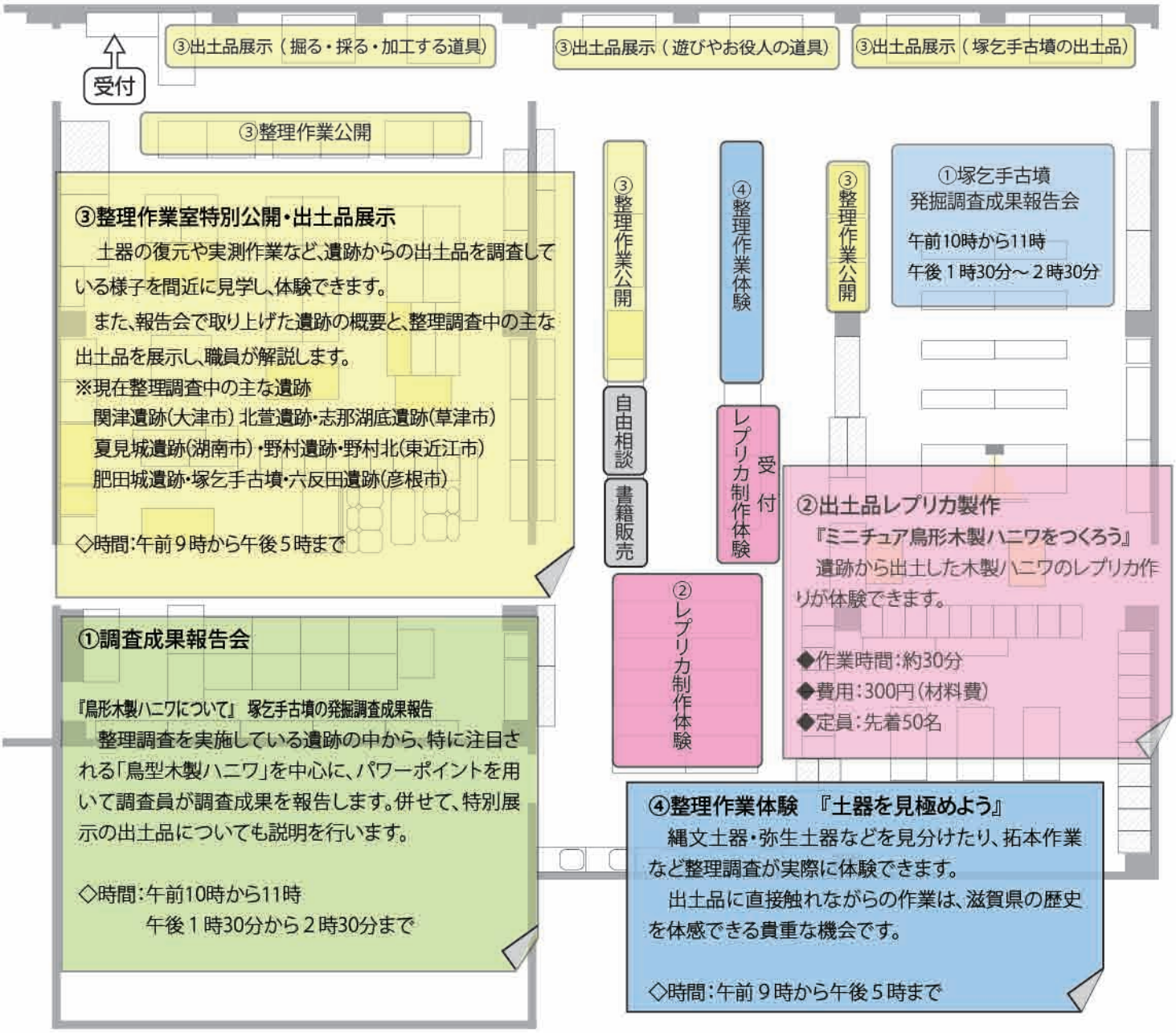
①調査成果報告会

『鳥形木製ハニワについて』 塚乞手（つかごえで）古墳の発掘調査成果報告

②出土品レプリカ製作『ミニチュア鳥形木製品をつくろう』

③整理作業室特別公開・出土品展示

④整理作業体験



③整理作業室特別公開・出土品展示

土器の復元や実測作業など、遺跡からの出土品を調査している様子を間近に見学し、体験できます。

また、報告会で取り上げた遺跡の概要と、整理調査中の主な出土品を展示し、職員が解説します。

※現在整理調査中の主な遺跡

関津遺跡(大津市) 北萱遺跡・志那湖底遺跡(草津市)
夏見城遺跡(湖南市)・野村遺跡・野村北(東近江市)
肥田城遺跡・塚乞手古墳・六反田遺跡(彦根市)

◇時間：午前９時から午後５時まで

②出土品レプリカ製作

『ミニチュア鳥形木製ハニワをつくろう』

遺跡から出土した木製ハニワのレプリカ作りが体験できます。

◆作業時間：約30分
◆費用：300円（材料費）
◆定員：先着50名

①調査成果報告会

『鳥形木製ハニワについて』 塚乞手古墳の発掘調査成果報告

整理調査を実施している遺跡の中から、特に注目される「鳥型木製ハニワ」を中心に、パワーポイントを用いて調査員が調査成果を報告します。併せて、特別展示の出土品についても説明を行います。

◇時間：午前10時から11時
午後１時30分から２時30分まで

④整理作業体験　『土器を見極めよう』

縄文土器・弥生土器などを見分けたり、拓本作業など整理調査が実際に体験できます。

出土品に直接触れながらの作業は、滋賀県の歴史を体感できる貴重な機会です。

◇時間：午前９時から午後５時まで

あの遺跡は今！⑦
平成20年８月24日（日）
財団法人滋賀県文化財保護協会